

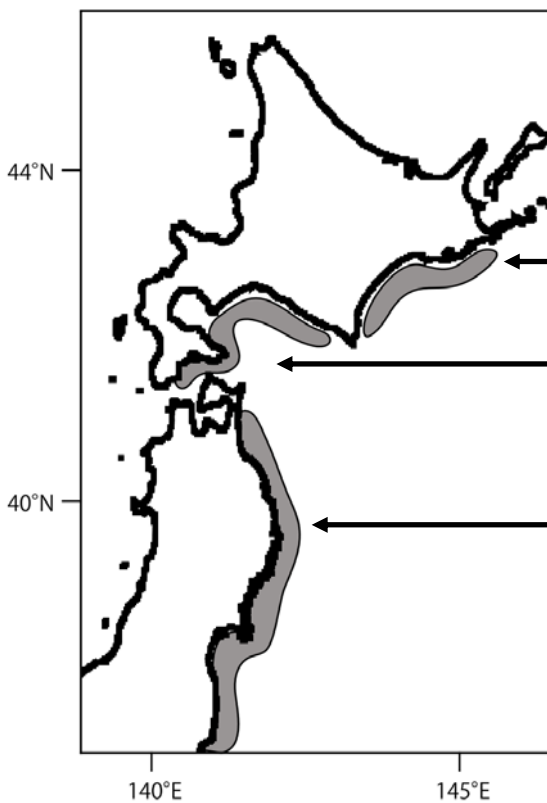


平成28年7月21日
国立研究開発法人 水産研究・教育機構

平成28年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
北海道区水産研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(平成28年8月～9月)のポイント



常磐～道南太平洋海域のスルメイカの来遊量は前年並、
道東太平洋海域は前年を下回る。

道東太平洋海域：
来遊量は前年を下回る。
魚体は前年より小さい。

津軽海峡～道南太平洋海域：
来遊量は前年並。
魚体は前年並。

常磐～三陸海域：
来遊量は前年並。
魚体は前年並。

問い合わせ先

国立研究開発法人水産研究・教育機構 北海道区水産研究所

担当：業務推進部 大迫、塚本
資源管理部 伊藤、岡本

電話：011-822-2131、ファックス：011-822-3342

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.fra.go.jp/>

平成28年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2016年8月～9月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域

対象漁業：いか釣り、底びき網、定置網、まき網

対象魚群：冬季発生系群（2016年級群）

1. 常磐～三陸海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

- (1) 来遊量：前年並。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年並。

2. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

- (1) 来遊量：前年並。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年並。

3. 道東太平洋海域（いか釣り、底びき網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年より小さい。

I 予報の説明

2016年6月上旬～6月下旬に実施した漁場一斉調査の結果、および6月までの漁況経過の結果を主要な情報として8月～9月のスルメイカの来遊量を予測すると、常磐～道南太平洋では前年並、道東太平洋では前年を下回ると予測される。各海域における見通しは以下の通りである。

1. 常磐～三陸海域

この海域の漁獲対象資源は太平洋沿岸域を北上する群れを主体に、津軽海峡から来遊する日本海由来の群れが含まれると考えられる。三陸周辺海域（41°N以南、143°E以西）における漁場一斉調査でのCPUE（いか釣り機1台1時間あたり漁獲尾数）は前年並であったことから、太平洋沿岸域を北上する群れの来遊量は前年並と予測される。津軽海峡からの来遊量は前年並と予測される（後述）。以上のことから、常磐～三陸海域への来遊量は前年並と予測される（前年の漁獲量は、それ以前の5カ年（2010年～2014年）平均に比べて少なかった）。第2回東北海区海況予報（水産研究・教育機構）によると、近海における7月の黒潮続流の北限位置は前年並であるが、親潮第1分枝の張り出しは極めて北偏で推移すると予測されている。また、水産研究・教育機構の海況予測システム（FRA-ROMS*）によると、常磐～三陸南部海域の8月の50m深水温は前年よりも高いと予測されている。したがって、沿岸域を北上する群れの移動が早く、常磐～三陸海域内で主漁場が北偏する可能性がある。魚体サイズは、漁場一斉調査の結果から、前年並の大きさの個体が主体になると考えられる。

*国立研究開発法人水産研究・教育機構により開発され、2012年5月より運用を開始した海況予測システム

2. 津軽海峡～道南太平洋

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沿岸域を北上する群れと津軽海峡から来遊する日本海由来の群れが含まれると考えられる。函館港に水揚げされた小型いか釣り漁船によるCPUEは前年並であったが、津軽海峡東口周辺海域（41°N以北、143°E以西）における漁場一斉調査でのCPUEは前年を上回った（前年漁獲なし）。1で述べた通り、太平洋沿岸域を北上する群れの来遊量は前年並と予測された。以上のことから、津軽海峡東口～道南太平洋海域への来遊量は前年並と予測される。6月下旬～7月上旬に日本海で実施された漁場一斉調査の結果から、津軽海峡西口周辺海域における来遊量は前年並と予測される。以上のことから、津軽海峡～道南太平洋海域への来遊量は前年並と予測される（前年の漁獲量は、それ以前の5カ年平均に比べて少なかった）。前年の漁場一斉調査では津軽海峡東口周辺海域で漁獲が無かったため、前年の魚体サイズとの比較に三陸周辺海域と日本海での漁場一斉調査結果を利用した結果、本年は前年並の大きさの個体が主体になると考えられる。

3. 道東太平洋

この海域に来遊する漁獲対象資源は、太平洋沖合域を北上する群れと考えられる。漁場一斉調査における沖合域（143°E以东）でのCPUEは前年を下回ったことから、道東太平洋へのスルメイカの来遊量は前年を下回ると予測される（前年の漁獲量は、それ以前の5カ年平均に比べて多かった）。FRA-ROMSによると、本年6月～7月中旬は前年同様に道東太平洋海域付近に暖水塊が形成されているが、小型いか釣り船による道東での初水揚げは前年より遅れていることから（前年は7月11日に初水揚げがあったが、本年は7月19日時点でまだ無い）、道東沿岸域への北上回遊時期は前年より遅れている可能性がある。魚体サイズは、漁場一斉調査の結果から、前年より小さい個体が主体になると考えられる。

II 漁場一斉調査結果

1. 太平洋第1次漁場一斉調査

6月上旬～6月下旬に太平洋で実施された漁場一斉調査（釣り）の結果、調査海域全体の平均CPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は0.18尾であり、前年（1.01尾）を下回った（図1）。三陸周辺海域では0.07尾であり、前年並（0.07尾）であった。津軽海峡～道南太平洋海域では0.15尾であった（前年漁獲なし）。沖合域では0.23尾であり、前年（1.37尾）を下回った。

漁場一斉調査で漁獲されたスルメイカの外套背長組成は、モードが15cmにある単峰型の組成で、前年（17cm）より小型であった。海域別にみると、三陸周辺海域のモードは15～16cmにあり、前年並（16cm）であった（図2）。沖合域のモードは15cmであり、前年（17cm）よりも小型であった。津軽海峡～道南太平洋海域のモードは16cmであった（前年漁獲なし）。

2. 日本海漁場一斉調査

6月下旬～7月上旬に日本海で実施された漁場一斉調査の結果、津軽海峡西口周辺海域（39°N～42°N、138°E～140°E）における平均CPUEは13.4尾であり、前年並（16.6尾）であった。外套背長組成のモードは19cmにあり、前年（20cm）よりやや小さかった。

III 各海域の漁況経過

太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）における年間推定漁獲量は2011年（173千トン）以降減少傾向を示し、2015年は76千トンであった（図3）。主漁場は常磐以北太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸海域と津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域に区分される。2015年8月～9月の推定漁獲量（生鮮）は29千トンであり、常磐～三陸海域では12千トン、津軽海峡～道南太平洋海域では3千トン、道東太平洋海域では13千トンであった（図4）。同年以前の5カ年（2010年～2014年）平均比は、道東太平洋海域で154%であったのに対し、常磐～三陸海域と津軽海峡～道南太平洋海域ではそれぞれ67%、38%であり、漁獲量は少なかった。根室海峡～オホーツク海および千葉県以南の海域での推定漁獲量は2千トンであった。

2016年5月～6月の太平洋沿岸主要港での推定水揚げ量（生鮮：速報値、一部未集計）は848トンで、前年（931トン）を下回った。常磐～三陸海域の主要港では745トンで、前年（512トン）を上回った。津軽海峡～道南太平洋海域の主要港では85トンで、前年（292トン）を下回った。千葉県以南では18トンで、前年（127トン）を下回った。なお、参画道県における代表的な漁況経過を表1に示した。

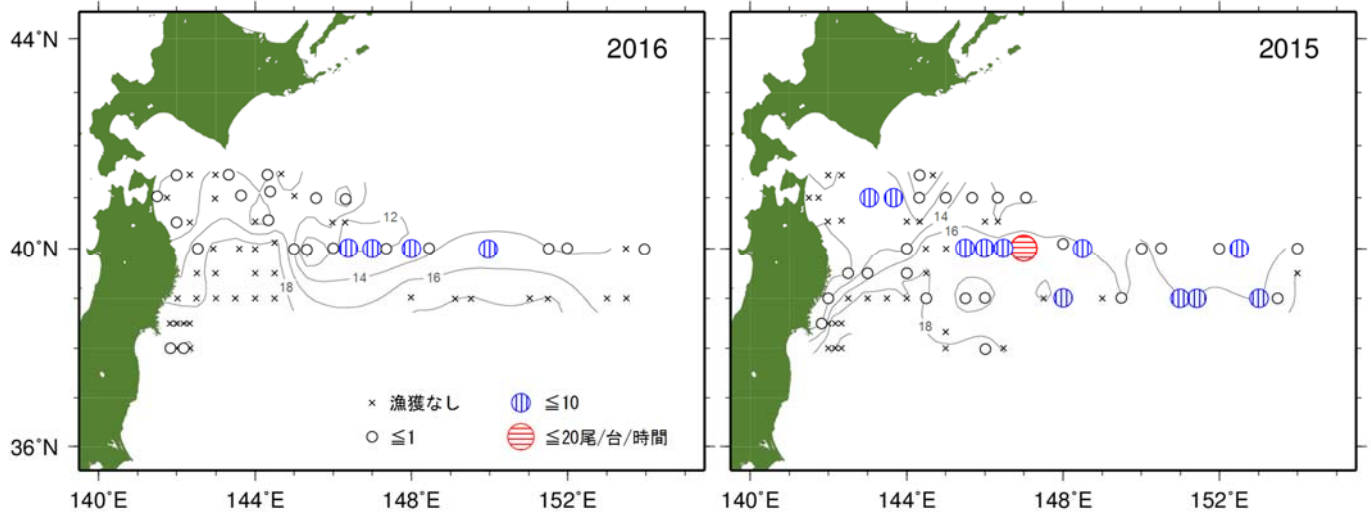


図1. 太平洋第1次漁場一斉調査の結果

2015年、2016年6月上旬～6月下旬のいか釣りによるスルメイカのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布を左図右下の凡例にしたがって示し、実線は海面水温の等温線を示す

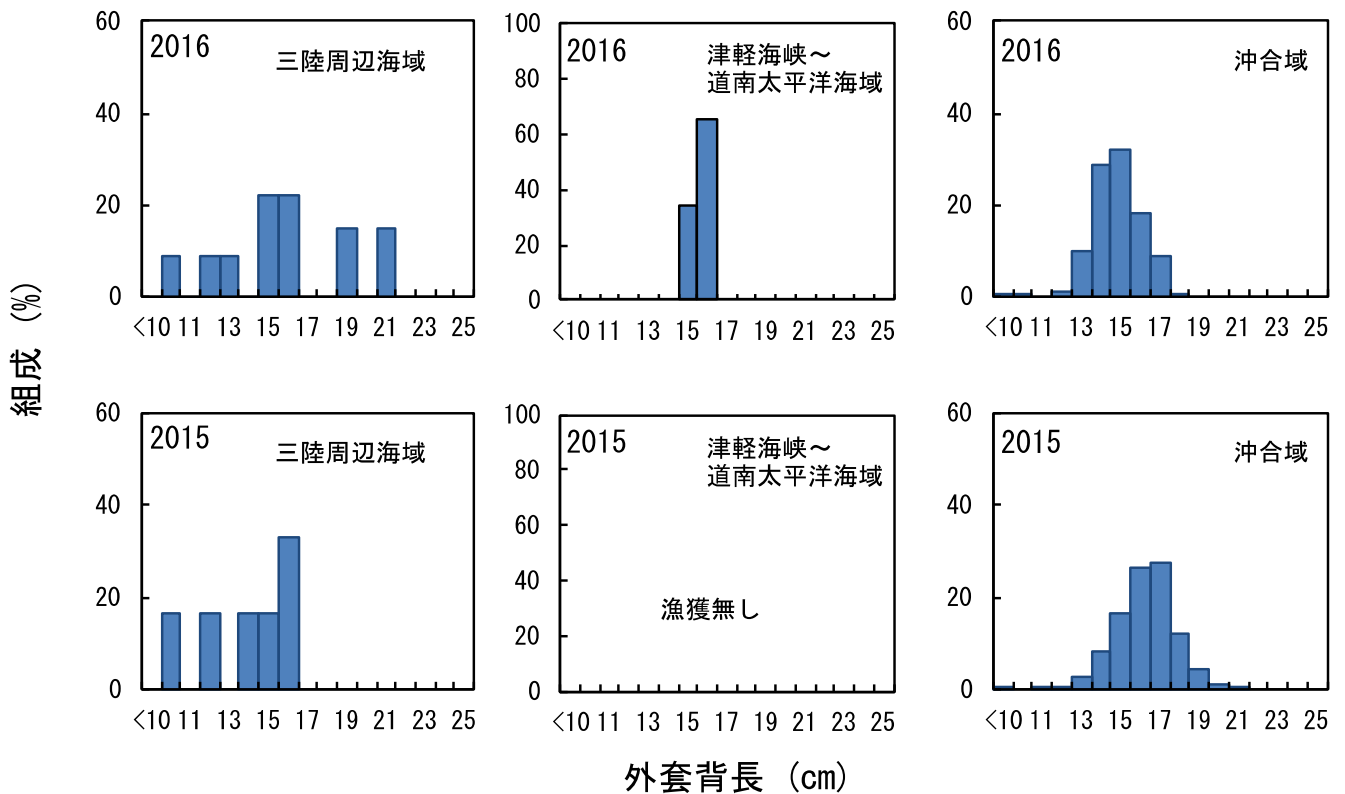


図2. 太平洋第1次漁場一斉調査（三陸周辺海域・津軽海峡～道南太平洋海域・沖合域）による外套背長組成の結果

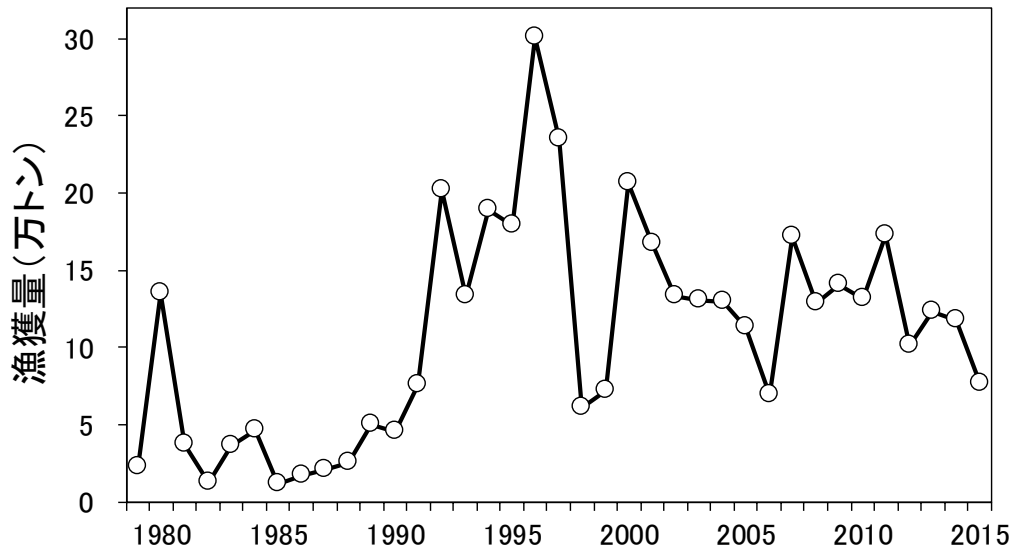


図3. 太平洋におけるスルメイカの推定漁獲量の年推移

(集計値は暦年)

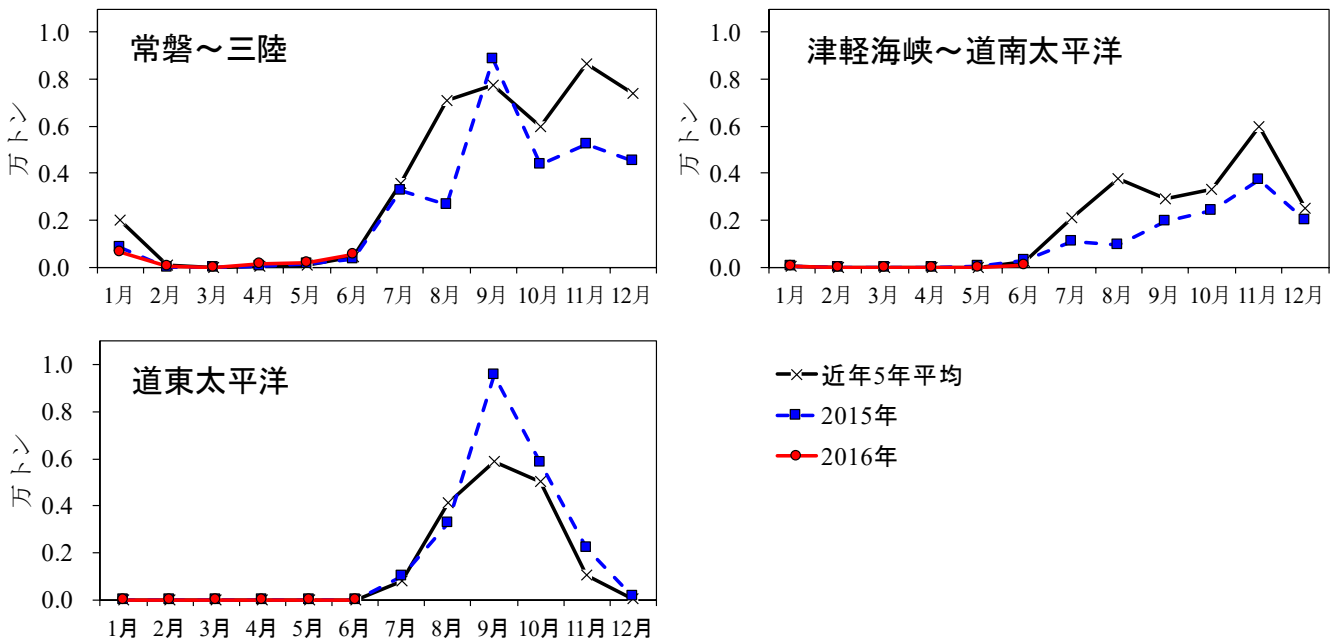


図4. スルメイカの月別海域別の推定漁獲量 (生鮮)

近年5年平均は2011年～2015年の平均

(釣り・定置網・底びき網・まき網)

表1. 漁況経過 (2016年5月～6月、一部未集計・暫定データ含む)

	漁況経過
北海道 道東	7月19日現在, 初水揚げはない(前年は7月11日に厚岸港で釣りによって初水揚げ)。
北海道 道南	6月の函館港への釣りによる水揚げ量は61トン(前年比75%)であった。CPUEは前年比89%であった。
青森	6月の白糠港への釣りによる水揚げ量は78トン(前年比68%)であった。CPUEは前年比75%であった。6月の八戸港と大畑港への釣りによる水揚げ量はそれぞれ16トン(前年比50%)、4トン(前年比297%)であった。また、八戸港への底びき網による水揚げ量は161トン(前年比188%)であった。
岩手	6月の主要7港への底びき網による水揚げ量は97トン(前年比4208%)、定置網による水揚げ量は11トン(前年比20%)であった。
宮城	5月～6月の主要10港への底びき網による水揚げ量は93トン(前年比952%)、定置網による水揚げ量は5トン(前年比109%)であった。釣りによる水揚げはなかった。
福島	5月の主要港への沖合底びき網による水揚げ量は0.003トンであった(前年漁獲なし)。6月のデータは未集計。
茨城	5月～6月の主要港への沖合底びき網による水揚げ量は2トン(前年比259%)、小型底びき網による水揚げ量は0.3トン(前年比56%)であった。
千葉	5月の主要港への定置網による水揚げ量は1トン(前年比31%)であった。釣りによる水揚げはなかった。6月のデータは未集計。
神奈川	5月～6月の主要2港への定置網による水揚げ量は2トン(前年比87%)であった。長井港への釣りによる水揚げ量は1トン(前年比91%)であった。
静岡	6月の仁科浜港への釣りによる水揚げ量は7トン(前年比76%)であった。CPUEは前年比101%であった。
三重	5月の主要港への中型まき網による水揚げ量は4トン(前年比88%)、定置網による水揚げ量は2トン(前年比273%)であった。6月のデータは未集計。
和歌山	6月のすさみ港への釣りによる水揚げ量は1トン(前年比9%)であった。CPUEは前年比7%であった。
高知	5月～6月の主要3港への釣りによる水揚げはなかった。

注：CPUEは1日1隻当たりの漁獲量

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	三重県水産研究所
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	和歌山県水産試験場
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
福島県水産試験場	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 東北区水産研究所 日本海区水産研究所
茨城県水産試験場	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 北海道区水産研究所
千葉県水産総合研究センター	
神奈川県水産技術センター	
静岡県水産技術研究所	